

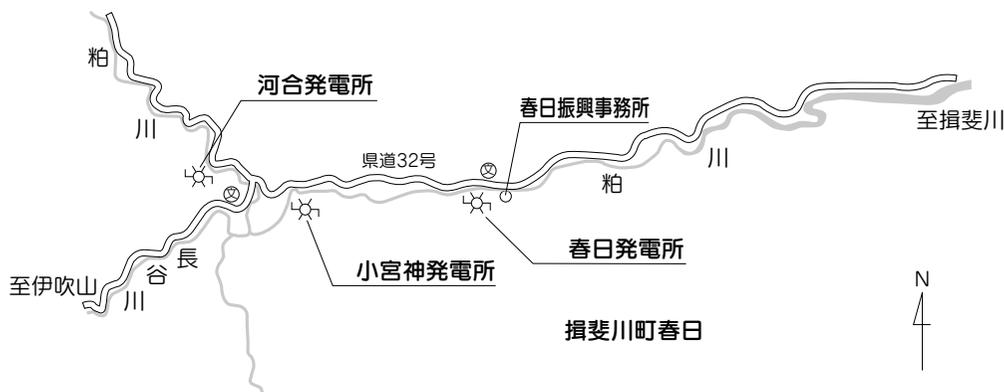
中部の

# エネルギーを 築いた



岐阜電灯の第12代岡本太右衛門と  
岐阜電気の第13代岡本太右衛門

～岐阜で鑄造業を営み、地元の公益事業に貢献～



岐阜電気(株)建設の水力発電所の所在地

岐阜市は1889(明治22)年に発足した。その5年後の1894(明治27)年、第12代岡本太右衛門をはじめ地元の資産家、地元銀行3行(濃厚・岐阜・十六)等が発起人となり、岐阜電灯(株)を資本金3万円で設立した。翌年、市内今川町に火力発電所を建設し、岐阜県下で初めて一般への供給を開始した。

当初は、電灯が一般市民に理解されなかったが、徐々に普及し需要も増加した。また、火力発電から水力発電へと移行する時期でも

あったので、第13代岡本太右衛門等が岐阜電気(株)を1907(明治40)年に設立し、岐阜電灯を合併した。そして翌年、揖斐川水系粕川に小宮神水力発電所を建設、岐阜市内に電気を送った。

今月号は、このように早い時期から電気事業を立上げ、地元へ発電所を建設し、近代産業の形成と発展に貢献した第12代・第13代岡本太右衛門を紹介する。

## 岐阜電灯と第12代岡本太右衛門

(1) 御鑄物師(おんいものし)の岡本太右衛門家  
戦国時代の1560(永禄3)年、岐阜城下で初代岡本太右衛門が鑄物業を創業した。その後、岡本家は代々鑄物師職の免許を受け、銅鉄で鍋釜類の鑄造を行ってきた。また、梵鐘を鑄造し岐阜県下等の寺に納めてきた旧家である。

本家12代目にあたる岡本太右衛門(定景)は、1849(嘉永2)年に岐阜市金屋町に生まれた。家業の鑄物業を営む傍ら、岐阜電灯の設立発起人から社長に就任、岐阜市議員、商業会議所副会頭などの公職、さらに濃厚銀行頭取、十六銀行取締役、岐阜米穀取引所理事に就任す

るなど幅広く活躍したが、1907(明治40)年、突然病に罹り没した。

## (2) 岐阜電灯(株)を設立し、取締役社長に就任

岐阜電灯(株)は、1894(明治27)年に設立され、当初、梅田正明(元県財政課長)が社長を務めた後、12代岡本太右衛門が社長に就任、岐阜市今川町に火力発電所(出力：130kW)を建設し電気



第12代岡本太右衛門

供給を始めた。火力発電所の設備は、三吉電機工場製のエンジン10号型直流発電機25kW 2台、水平多管式汽缶3個各50馬力、汽機はタンデムコンパウンド80馬力の国産品であった。点灯当時「岐阜市では電気灯珍しく、毎夜今川町なる岐阜電灯株式会社発電所前は見物の山、付近には屋台店もできる勢い…」と記述されている。

## 岐阜電気(株)と13代岡本太右衛門

第13代の岡本太右衛門は、12代定景の長男として生まれ、父の没後、家業を継いだ。1923(大正12)年個人商店から(株)鍋屋鑄造所を創立し、1927(昭和2)年に株式会社岡本商店と改称した。1907(明治40)年、岐阜電気(株)を設立し、岐阜電灯を合併して取締役社長に就任した。その傍ら岐阜市会議員、岐阜商業会議所会頭などの公職、さらに十六銀行、三重瑠瑯、岐阜貯蓄銀行などの取締役、また美濃電気軌道、岐阜ガスなどの相談役に就任した。

岐阜電気は、揖斐川水系粕川に次の通り3つの水力発電所を建設した。

### (1) 小宮神水力発電所

岐阜電気は伊吹山麓を源として揖斐川に合流する粕川に1908(明治41)年、小宮神発電所を建設した。西濃地方での最初の発電所で有効落差33.3mの水路式発電所である。粕川の



第13代岡本太右衛門

ざれ石」が有名である。水車はアメリカのモルガン・スミス社製500馬力、発電機はゼネラル・エレクトリック社製300kVAの各2台で、当初、認可出力300kWで発電し、岐阜、大垣、笠松町などに送電した。1937(昭和12)年に粕川支流の長谷川からの取水を追加し600kWに増強された。1974(昭和49)、落雷により発電所本館が焼損したが、地元住民の協力を得て再建され発電が続けられた。その後1982(昭和57)年、発電設備が老朽化したため改修が行われた。既設の水圧鉄管2本を利用し2台の横軸フランシス水車(出力：425kW×2)の間に1台の発電機(出力：900kVA)を回転させる両軸水車方式を中部電力(株)管内で初めて採用し認可出力800kWになった。

改修に伴って使われなくなったアメリカ製の水車と発電機2組のうち1組が中部電力より岐阜市に寄贈され、現在、金華山北側にある岐阜市鏡岩水源地に保管されている。



現在の河合水力発電所(出典：水カドットコム)

## (2) 河合・春日水力発電所

岐阜電気 2 番目の水力発電所は、1913(大正 2)年に建設された河合発電所(出力：1,000 kW)で、有効落差93.3<sup>メートル</sup>の水路式発電所である。

1978(昭和53)に改修工事を行い、水車は日本工営社製1,560kW、発電機は明電舎製1,600 kVAで、認可出力1,500kWに増強された。

岐阜電気 3 番目の発電所は、1920(大正 9)年に建設された春日発電所(出力：1,000 kW)で、有効落差58.4<sup>メートル</sup>の水路式発電所である。1986(昭和61)年に改修工事を行い、水車は1,100kW、発電機は1,000kVAの各 2 台で、

現在の春日水力発電所(出典：水カドットコム)



共に日本工営社製である。現在、認可出力1,800kWで運転されている。

なお、両発電所とも改修により撤去された発電設備はスクラップにされた。

## (3) 名古屋電灯(株)が岐阜電気(株)を合併

岐阜電気の水力発電は、1987(明治30)年代の石炭高騰による火力発電から水力発電への転換期、電灯需要の急増による小規模から大規模水力発電への転換期、

高圧・長距離送電技術の開発期を背景に展開された。これに伴い、資本金も当初の30万円から20倍の600万円に増額された。

しかし1909(明治42)年、岐阜市内を独占供給区域とすることを認めさせる代わりに、会社から毎年800円を市に支払うという報償契約を締結した。このことなどが基因となって料金が割高となり、1914(大正 3)年、岐阜電気の電灯料金値下げを要求する、いわゆる電灯事件が起きた。

当時、電灯料金値下げ期成同盟会が作成した資料をみると、岐阜電気の電灯料金は岡崎、浜松、静岡、長野、長岡市などの料金と比較して10~50%も高かったのがその理由で、料金値下げ要求市民運動は3日3晩続いた。このため岐阜県知事が岐阜市長、岡本社長などと協議のうえ仲裁に入り、生活灯といわれた10燭光の電灯料金を値下げすることなどを盛り込んだ内容で調停した。その後、増大する需要に対し供給力不足になったり、岐阜電気の市営化建議案が提出されたりした。これらの悪条件が重なり自社独自で経営をすることが困難となり、名古屋電灯が岐阜電灯を吸収合併することになった。

最終的に岐阜の事業家は電気事業から手を引くことになったが、地元の近代産業の形成と発展に大きく貢献した。

(寺沢 安正)